



あかちゃんが生まれました

長崎源之助作 司 修画



〈著者紹介〉

なが さき げん の すけ

長崎源之助

1924～

横浜生まれ。太平洋戦争末期に召集され、中国大陸にわたる。復員後、文房具店を営みながら、「童話」・「豆の木」などに作品を発表し、創作活動始める。おもな著書に、『ハトは見ている』（東都書房）、『おかあさんの顔』（盛光社）、『ヒョコタンの山羊』（理論社・'68年度日本児童文学者協会賞受賞）、『ゲンのいた谷』（実業之日本社）、『焼けあとの白鳥』（大日本図書）などがある。現在、日本児童文学者協会、日童クラブ会員。現住所・横浜市南区井土ヶ谷中町152

〈画家紹介〉

つかさ

司

おさむ

修

1936～

群馬県生まれ。詩人、画家たちと交わるうちに、1955年ごろから絵画に志し、独学で絵をかきはじめた。1962年、自由美術家協会に参加。1965年、主体美術協会創立とともに会員になり、現在、さしえ、装幀、絵本の分野で活躍している。1968年、画集『コラージュ』を出版。おもな絵本に『ほしのひかったそのばんに』『へいしのなみだ』（いずれもこぐま社）がある。

N D C. 913

あかちゃんが生まれました

なが さき げん の すけ

長崎源之助

初版 1970年 大日本図書

75p. 22cm

小学校低学年向

子ども図書館



1970年5月30日 第1刷発行

1979年1月25日 第15刷発行

著者 長崎源之助／発行者 佐久間裕三／発行
所 大日本図書 東京都中央区銀座1－9－10
〈〒〉104 東京(03) 561－8671～9 振替 東京
9-219番／印刷 株式会社金羊社 製本／岸
田製本

あかちゃんが生まれました

© 長崎源之助

子ども図書館

あかちゃんが生まれました

長崎源之助



Kodomo Toshokan

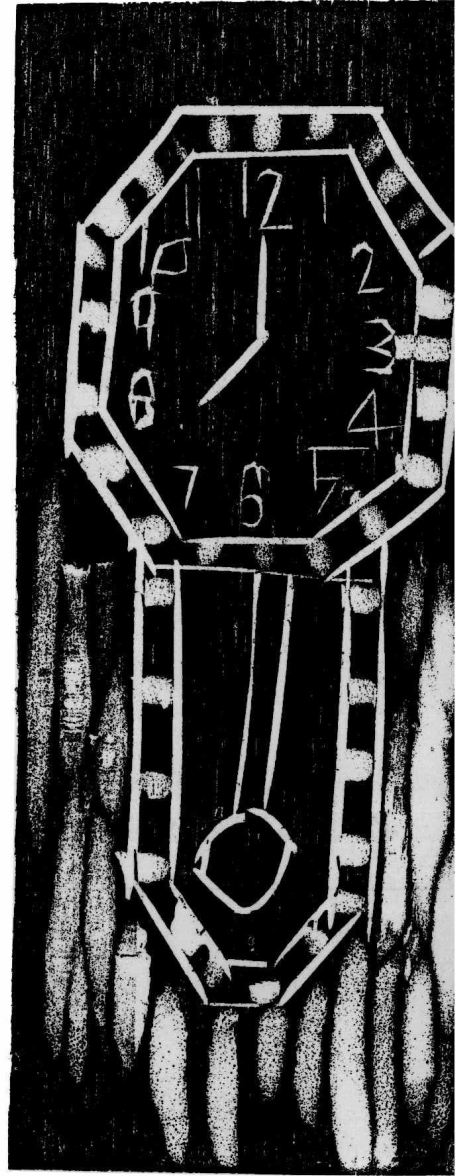
大日本図書

あかちゃんが生まれました

- 1 女の子を生まんでね・5
- 2 おにいちゃんのけいさん・19
- 3 ちりがみは空へ・29
- 4 ちびっこせんでんカー・39
- 5 あっ、除夜のかね！・55
- 6 かねと汽笛のシンホニー・63

子どもの一日の経験と成長をヴィヴィッドに描く!!

鳥越 信・73



1 女おんなの子こを生うんでね

「おい、おい！」

ゆさぶられて、みきおくんは、目めをさましました。

「はやくおきろ！」

おにいちやんのたけしくんが、ジャンパーのそでにうでをとおしながら、足あしでみきおくんのからだをゆさぶっているのです。

「ねむいよう。」

みきおくんは、片目かためだけあけて、顔かおをしかめました。

「ばかつ、ぐずぐずしてると、ふんづけるぞ。」

たけしくんの足^{あし}に、ちからがはいりました。

「いたい！」

みきおくんは、ようちえんじ、たけしくんは、小学^{しょうがく}三年^{ねんせい}生。おにいちゃんにふみつけられたら、つぶれてしまいます。

「もしかしたら、きょう、あかんぼうが生ま^うまれるかもしれないんだぞ。」

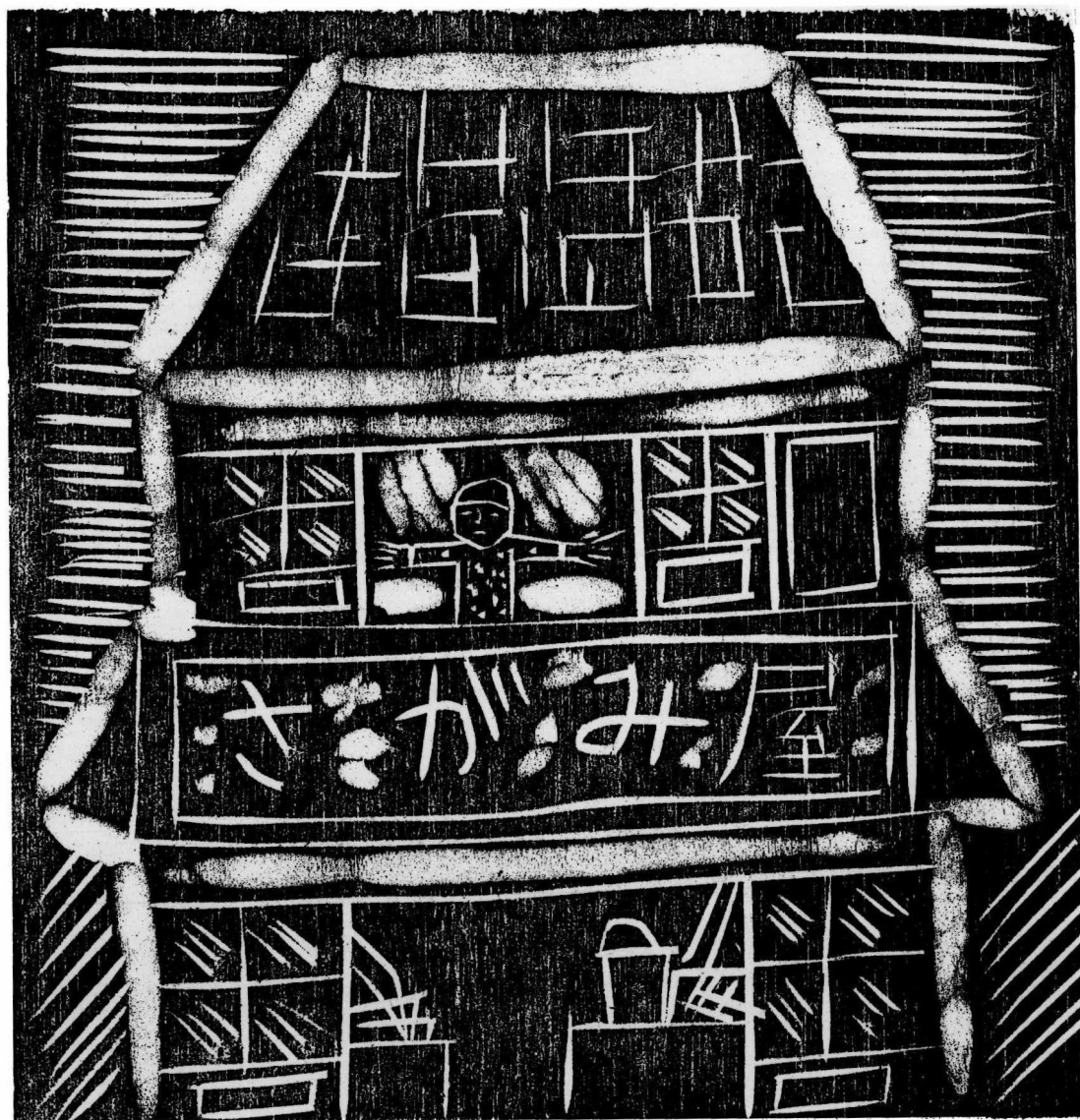
「えっ！」

みきおくんは、とびおきました。

「ほんと、おにいちゃん？」

「ああ、いま下^{した}へいったら、おかあさん、おなかがいたみだしたつて、いったもん。」

こうしてはいられません。みきおくんは、パジャマのまま、かいだんをばたばたとかけおりました。



「あぶないじゃないの、そんなにいそいで。」

台所^{だいどころ}であらいものをしていたおかあさんが、ふりかえっていいました。

おにいちやんの口^{くち}つぷりだと、いまにも生まれそうでしたが、そんなようすはすこしありません。あいかわらず、大きなおなかをかかえて、へいきな顔^{かお}をしています。

「おかあさん、おなかいたくないの？」

「ええ、いまは、おさまったわ。」

「じゃあ、あかちゃん、まだ生まれないの？」

「生まれるわよ、きょう。だから、病院^{びやういん}へいくまえに、そこらをかたづけておこうとおもってるのよ。」

そういいながらも、おかあさんの手^てはやすみません。なべのそこを、ごしごしこすっています。

「おーい、おかあさん！」





店のほうから、おとうさんの声こゑがとんできました。

「はやくしたくして、病院びやういんへいけよ。あとかたづけは、正子まさこがきたら、やらすから。」

「はい。」

おかあさんは、へんじをしました。が、やめようとはしません。なべがあらいいおわると、ぞうきんをゆすいで、ガス台だいをふきはじめま



した。大きなおしりが、みきおく
んの目のまえで、もつくり、もつ
くりゆれています。

「おかあさん、はやく病院へいき
なよ。」

みきおくんは、しんぱいになっ
ていました。

「あんたこそ、はやくきがえなさ
い。かぜひくじゃないの。」

そういわれたら、みきおくんは、
きゆうにさむくなりました。そこ
で、あわてて、べんじよにとびこ
みました。ようをたして、でき
たら、おかあさんは、こんど、台

所の板の間をふいていました。おなかが大いので、とてもせつな
そうです。

「ばかつ、なにをしてるんだ！」

おとうさんがやってきて、どなりました。

「そんなことしてて、まにあわなかったら、どうするんだ。」

「だいじょうぶですよ、三人めですもの。あまりはやく病院へいつ
たつて、まちくたびれるだけですわ。」

そういうおかあさんの顔は、自信にみちていました。

「ほんとに、おまえときたら、きちょうめんもいいが……。」

おとうさんのほうが、しんぱいそうで、まごまごしています。

そのとき、店のほうから、お客さんのよぶ声がしました。

「せっけん、ちようだいなー。」

「はい。いらっしゃーい！」

おとうさんは、とんでいきました。

おかあさんが病院へでかけたのは、それから三十分もたってからです。たけしくんとみきおくんに朝食をたべさせ、おてつだいの正子おばちゃんがかけつけるのをまって、

「それじゃあ、おとうさん。」

と、やつと、おみこしをあげました。

「わるいわね、いそがしいときで。」

「ばか。」

その日は、大みそかだったので。一年じゅうでいちばん店のいそがしい日、つまり、かせぎどきだったので。

「うまくいけば、元日に生まれるかもしれないな。」

まえまえから、おとうさんは、そういつて、たのしみにしていたのです。

ところが、一日ちがいで、とんだせわしいことになりました。

「ついていつてやることもできんし……。」



「だいじょうぶよ。あなたがきたからって、役にたつってわけでもないし。」

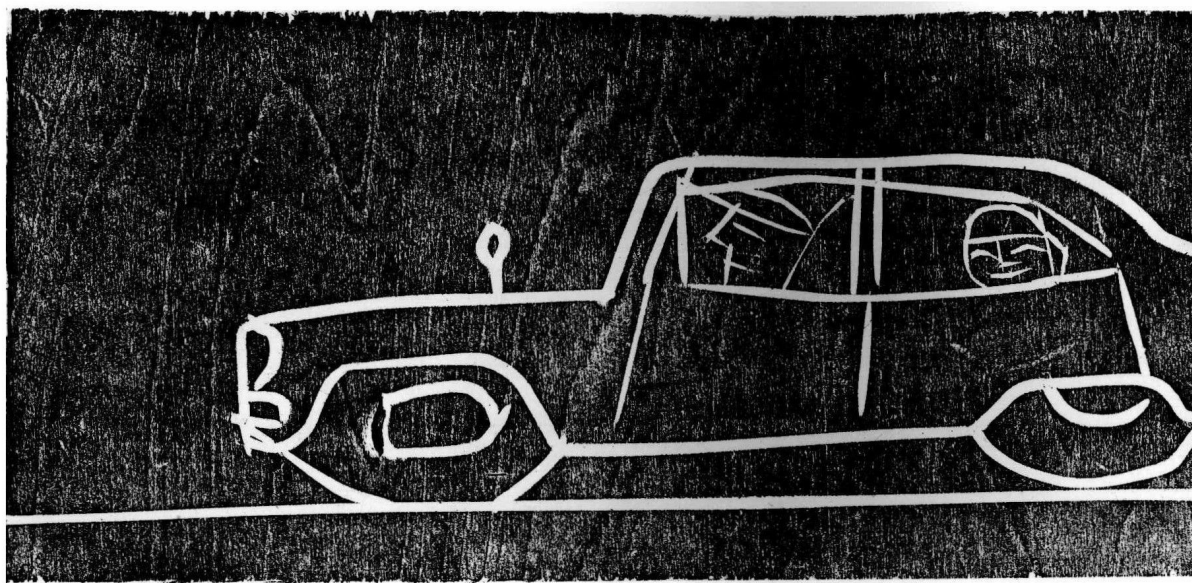
「そりゃあ、そうだけど……。」

「まあ、まかしときつて、いい子を生うでできますから。」

おかあさんは、大おおきなおなかをなでて、につこりわらいました。まるい顔かおが、いつそうまるく見みえました。

店みせのまえに、タクシーをとめると、おとうさんは、ふろしきづつみをほうりこみました。

「気きをつけてな。」



おとうさんは、おかあさんが
タクシーにのるとき、いたわる
ようにしていました。

「あら、おくさん、いよいよお
めでたなんですか。」

と、となりのやおやのおばさん
がかけてきました。すると、き
あわせたお客さんきやくも三、四人、
あつまってきていました。

「おだいじにね。」

「しつかりね。」

その人ひとたちに、おかあさんは、
いちいちわらいながらおじぎを
しました。